

小学校

平成 6 年 度

教育研究員研究報告書

教育課題

東京都教育委員会

平成6年度

教育研究員名簿

分科会	No.	地 区	学 校	氏 名	備 考
第 一 分 科 会	1	千代田区	お茶の水小	門脇 正	代表世話人 世話人
	2	墨田区	菊川小	桐生信一郎	
	3	大田区	南六郷小	菊池 隆	
	4	北 区	赤羽小	西田 眞理	
	5	板橋区	大山小	石川 禎一	
	6	葛飾区	梅田小	木暮 雄三	
	7	立川市	松中小	石坂 正雄	
	8	日野市	仲田小	雨宮 宣夫	
	9	羽村市	小作台小	木下 靖	
第 二 分 科 会	1	文京区	湯島小	谷口 義弘	世話人
	2	江東区	数矢小	森本 隆裕	
	3	世田谷区	京西小	久保田たま	
	4	杉並区	八成小	坂口 悟朗	
	5	練馬区	大泉南小	白井 真人	
	6	江戸川区	平井第二小	大塚 雅一	
	7	府中市	武蔵台小	馬場 宏治	
	8	町田市	町田第六小	百瀬 績	
	9	保谷市	本町小	小此木 始	
第 三 分 科 会	1	台東区	浅草小	颯田 康	世話人
	2	品川区	第二延山小	櫻井 恍夫	
	3	中野区	野方小	齋藤久美子	
	4	荒川区	第二峡田小	内海 和夫	
	5	足立区	千寿小	松谷 喜雄	
	6	八王子市	南大沢小	茂木 敏光	
	7	小平市	小平第一小	植村 浩一	
	8	多摩市	多摩第一小	八坂 武司	

担当指導主事

教育庁指導部指導企画課

大橋直子

多摩教育事務所指導課

鈴木一徳

目 次

新しい学力観に基づく指導法の研究

I	共通研究主題設定の理由	2
II	研究の内容・方法	3
	1. 各分科会の研究主題について	3
	2. 研究の進め方	3
III	自ら問題意識をもち主体的に学習する児童を育てるための支援の在り方（第1分科会）	
	1. 分科会研究主題設定の理由	4
	2. 研究のねらいと仮説	4
	3. 実践事例	6
	4. 研究のまとめと今後の課題	10
IV	一人一人のよさを生かすための支援の在り方（第2分科会）	
	1. 分科会研究主題設定の理由	11
	2. 研究のねらいと仮説	11
	3. 実践事例	13
	4. 研究のまとめと今後の課題	17
V	一人一人のよさを認め合い、高め合う支援の在り方（第3分科会）	
	1. 分科会研究主題設定の理由	18
	2. 研究のねらいと仮説	18
	3. 実践事例	20
	4. 研究のまとめと今後の課題	23
VI	研究のまとめと今後の課題	24

新しい学力観に基づく指導法の研究

I 共通研究主題設定の理由

今日我が国は、経済や科学技術の著しい進展を遂げ、近代化の成熟期を迎えている。これからの社会は、激しく変化することが予想されているが、その変化の方向は予想することが難しく、不透明な時代である。これからの時代は、自ら新しい目標を模索しつつ、新しい文化を創造していく時代であるといえる。

こうした時代の要請から、これからの学校教育は、社会において生ずる様々な問題についてその問題の本質に気付き、自ら考え主体的に判断し、解決できる資質や能力の育成を図ることが重要である。このためには、児童一人一人が自分自身の中に自分なりの生き方や、ものの見方・考え方をもち、個性や創造性を発揮しつづいていくことができる資質や能力の育成を図ることが必要である。

つまり、知識や技能を共通して身に付けさせることを重視した教育の在り方を根本的に見直し、児童が自ら考え、主体的に判断し、行動できる資質や能力の育成を目指した教育への転換を図っていく必要があると考える。

新しい学力観に立つ教育においては、児童の内発的な学習意欲を喚起し、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などを学力の基本としている。その指導に当たっては、児童一人一人の能力や適性などを引き出し育て、児童一人一人の成長過程を温かく見守るという指導観や、児童の側に立ち、一人一人がよさや可能性を発揮できるようにし、その自己実現を支援していくという授業を創造していく必要がある。

このような学習指導を推進するに当たっては、次のような観点から学習材の工夫・開発を図り、また指導方法や評価方法の改善を図ることが必要であると考えた。

1. 児童の主体的な学習活動が中心に展開されるように、学習材の役割や機能についても見直し、その選択と開発を工夫する。
2. 指導目標の設定に当たっては、児童が分かりやすいように工夫したり、児童一人一人の興味や関心、思考の広がりに対応できるものに工夫する。
3. 課題探究的、問題解決的な学習活動や、体験的な活動を通して、実際に生きて働く力が育つように、学習内容や指導方法の改善を図る。
4. 個に応じた指導を工夫する。
5. 児童一人一人が自らのめあてを達成していけるように学習環境を工夫する。
6. 教師と児童、児童相互の人間関係を豊かにし、互いのよさに共感し合うことができるような指導方法や評価方法の改善を図る。

以上のような改善の視点に立ち、心豊かでたくましい児童を育成することが小学校教育における重要な課題と考え、本研究主題を設定した。

Ⅱ 研究の内容・方法

1. 各分科会の研究主題について

新しい学力観に立つ教育においては、学習活動を児童一人一人がそのよさや可能性を生かし、自らの力によって豊かに生きていくために必要な資質や能力を身に付ける過程ととらえており、教師はこうした児童の学習活動を温かく支援していくことが必要である。

そこで、本研究では、「児童一人一人が主体的に学習に取り組むこと」「一人一人のよさを認め合い、今後の学習や生活に生かしていくこと」「一人一人の児童が成就感がもてること」という観点に立ち、教師が児童に対してどのような支援をしていく必要があるかということ各分科会で研究していった。

各分科会の研究主題は、次の通りである。

- ・第一分科会 自ら問題意識をもち、主体的に学習する児童を育てるための支援の在り方
- ・第二分科会 一人一人のよさを生かすための支援の在り方
- ・第三分科会 一人一人のよさを認め合い、高め合う支援の在り方

2. 研究の進め方

共通研究主題を具現化するために、各分科会では次のような仮説を立て、研究を進めた。

- (1) 児童が自分なりの学習課題をもち、課題探究の過程において、学習する喜びを感じ意欲的に学習することができるよう、一人一人の考えを共感的にとらえ、支援することが主体的に学習する児童を育成するものとする。その際、下記の3点に留意した。

- ・児童が興味・関心をもち、課題を見出しやすい学習材の選択
- ・課題探究的な学習活動の在り方
- ・児童が自ら学習を振り返る評価の在り方 (第一分科会)

- (2) 学習過程の構成、児童の実態や変容に応じた支援をすることによって、児童一人一人のよさが生かされ、主体的に学習に取り組む児童を育成するものとする。その際、下記の3点に留意した。

- ・児童一人一人の思いや願い、考えを大切にすること。
- ・互いに認め合う場を設定すること。
- ・児童一人一人の資質や能力に応じたはたらきかけをすること。 (第二分科会)

- (3) 肯定的・共感的な見方や感じ方を育むとともに、かかわりを重視した学習活動を支援し、展開できるようにすることで、児童一人一人が互いのよさを認め合い、高め合う学習集団が成立する。その過程で育成された資質や能力は、児童一人一人が内に秘めている個性や創造性を発揮する力となり、また豊かな自己実現のための力となる。

(第三分科会)

なお、研究を進めるに当たっては、特に以下の事項に留意した。

- (1) 児童は本来様々なよさや可能性をもち、よりよく生きたい、より向上したいという望ましい欲求をもっているという児童観に立つ。
- (2) 授業研究を通して、具体的な支援の在り方を研究する。
- (3) 共通研究主題のもとに、各分科会の研究成果を生かして継続的に研究を進める。
- (4) 先行研究の成果を踏まえて、研究を進める。

Ⅲ 第一分科会

自ら問題意識をもち、主体的に学習する 児童を育てるための支援の在り方

1. 分科会研究主題設定の理由

これまでの授業においては、「教師が児童に多くの知識や技能を身に付けさせることに重点を置く。」という傾向が見られた。そのため、このことの見直しが強く求められ、新しい学力観に立った授業が実践されるようになった。

新しい学力観に立つ学習指導では、「教師が教えたことを児童がどれだけ学んだか」だけでなく、「児童自らが学習の課題あるいは目標にどう取り組み、どう探究に努めたか」という観点からとらえることが大切である。

そのためには、児童観・指導観・評価観をとらえ直し、「児童が自ら問題意識をもち、主体的に学習する授業」の創造が必要であると考えた。

本分科会では、「児童が自ら問題意識をもち、主体的に学習する授業」において、児童が自分の願いを満たすために自分が必要とする学習課題をもち、それを自分の力で、自分なりの方法を見出し、探究していく過程が重要であるにとらえた。

そこで「児童が自ら問題意識をもち、主体的に学習する授業」を具現化していくために、

- ・「児童のもつ願い」をしっかり受け止める。
- ・「児童のもつ願い」を満たすために一人一人の個性や興味に応じられるような学習過程を工夫する。
- ・児童のよさを認め、生かす場を工夫する。

ことに配慮し、支援を行うことが大切であると考え、本主題を設定した。

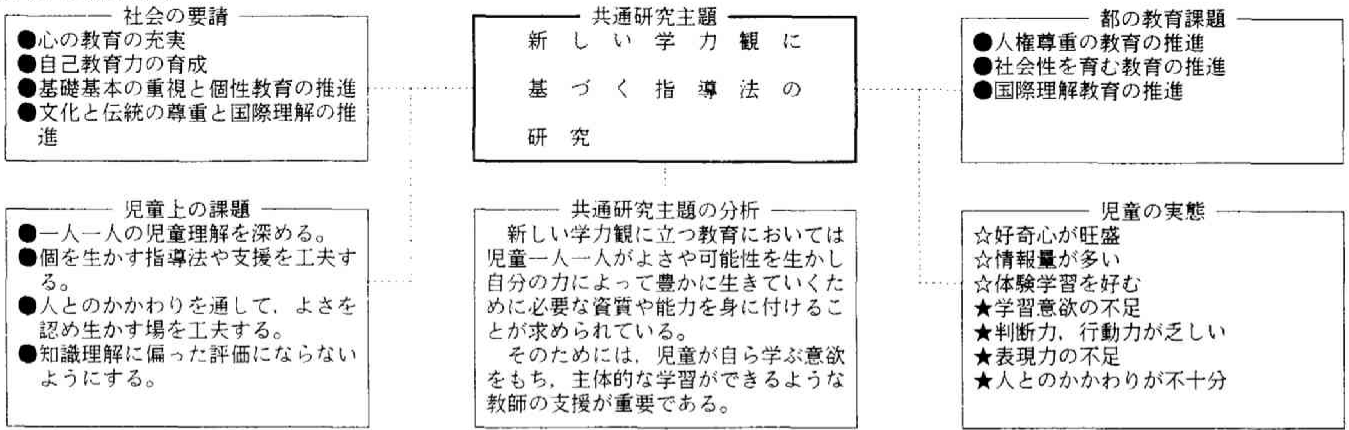
2. 研究のねらいと仮説

児童主体の学習を進めるためには、どのような支援の在り方がよいかを明らかにするため次のような仮説を設定した。

児童が自分なりの学習課題をもち、課題探究の過程において学習する喜びを感じ意欲的に学習することができるよう、一人一人の考えを共感できにとらえ、支援することで主体的に学習する児童に育つものとする。そこで、下記の3点に留意した。

- ・児童が興味関心をもち、課題を見出しやすい学習材の選択
- ・課題探究的学習活動の在り方
- ・児童が自ら学習を振り返る評価の在り方

研究の構想図



第一分科会研究主題
自ら問題意識をもち、主体的に学習する児童を育てるための支援の在り方

研究の仮説
児童が自分なりの学習課題をもち、課題探究の過程において学習する喜びを感じ意欲的に学習することができるよう、一人一人の考えを共感的にとらえ、支援することで主体的に学習する児童に育つものと考え。そこで、下記の3点に留意した。
・児童が興味関心をもち、課題を見出しやすい学習材の選択
・課題探究的学習活動の在り方
・児童が自ら学習を振り返る評価の在り方

学 習 過 程			
	課 題 を つ か む	課 題 を 探 究 す る	学 習 を 振 り 返 る
児童の活動	<ul style="list-style-type: none"> ●学習課題を明確にする。 ・生活経験、知識をもとにして考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ●課題探究の方法を考えて取り組む。 ・資料の活用をする。 ・必要な知識、技能を身に付ける。 ・話し合い活動を通して、考え方の相違点共通点に気付き認め合う。 ●探究したことをまとめ整理する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●学習の成果を確かめる。 ・話し合い活動を通して、自分の考えを深める。 ・互いのよさに気付き、高め合う。 ●学習の成果から、新たな課題を見付ける ●物事を成就した喜びや感動を味わい、新たな意欲へとつなげる。
教師の支援	<ul style="list-style-type: none"> ●児童の実態を把握し願いを受けとめる。 ●興味・関心・意欲を高める導入の仕方を工夫する。 ・具体物・社会的事象、自然事象などの提示・選択 ●児童を多面的にとらえ共感的な児童理解をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ●学習活動のための環境を工夫する。 ・探究に必要な場の確保 ●学習形態の工夫 ●学習活動の工夫（ワークシート、学習カードなど） ●教育機器の利用（パソコン、VTR、TVなど） ●体験的な活動、表現活動の時間を確保する。 ●探究していくための知識・技能を習得できるようにする。 ●個に応じた対応をする（ヒントカードの活用、資料の提示、方向の修正、示唆） 	<ul style="list-style-type: none"> ●互いのよさに気付くことができるようにする。 ・発表の場や発表の形態の工夫 ●肯定的評価により、児童に自信をもたせ発展課題への意欲付けをする。

育てたい児童像

- 問題意識をもって、学習に取り組むことができる児童
- 見通しをもって、主体的に取り組む探究していく児童
- 互いのよさを認め合い、自らの生活に生かしていこうとする児童

3. 実践事例（第2学年 道徳）

(1) 主題名 「みんなで使うものは大切に」

(2) 資料名 やぶれた本 出典 文溪堂 4-(1) 公德心，規則の尊重

(3) 主題設定の理由

① ねらいとする価値

公共物を大切にし、人に迷惑をかけないような心がけることは、人が社会生活を送る上で、考えなければならない大切なことである。しかし、現状は自分の利益や幸福を優先させようとする自分本意の傾向が、やや強いように思われる。このような意識を改めるために、自分の行動が他の人にどんな影響を与えているかを考えさせ、気付かせる必要があると考える。人々が、互いに迷惑をかけないように心がけ、社会の一員として人々とのかかわりの中で、共に生きているという自覚を持たせ、約束や決まりを守ることを通して公德心を養いたい。そして、みんなで使うものや場所を大切にし、その場の約束や決まりを守ることの大切さを考えさせ、自分を振り返り実践しようとする心情を育て、豊かな集団生活を送らせたいと考える。

② 児童の実態

「みんなで使うものは、どのように扱ったらよいか。」と尋ねれば、「大切に扱う。」「丁寧に扱う。」と言える子供たちである。みんなで使うものは、自分のものと同じように大切にしなければならないことは、今までの生活の中で注意されたり叱られたりしたことを通して知っている。しかし、自分の都合だけで行動してしまい、自分の何気ない行為が思わぬところで、人に迷惑をかけていることに気付いていないこともある。

みんなで楽しく生活するためには、自分のものを大切にすると同じようにみんなで使うものも大切にし、ひとに迷惑をかけないようにすることが大切であることに気付かせたいと考えている。

③ 資料について

学級文庫の本が乱雑になっていて、読みたい本がなかなかみつからない。やっとの思いで探し出したしげるだが、よしおと取り合いになってしまう。ゆみ子に注意されたが聞かず、結局その本の表紙を破いてしまう。ふたりは、本をそのままにしてしまうが、自分から進んで本の整理や修理をしているゆみ子の姿を見て、しげるとよしおは自分のことを恥ずかしく思う。こうしたしげるとよしおの行動を通して、自分の気持ちを優先することによって他の人に迷惑がかかることもあることを理解させたい。

また、ゆみ子の行動を通して、みんなで使うものの扱い方を考えさせ、みんなで使うものをよりいっそう大切にしようとする気持ちを持たせたい。

(4) テーマと関連する指導法の工夫

① 児童理解

児童の日々の生活の中でのものに対する意識や、みんなで使うものや自分のものはどのように扱っているかをある程度把握しておく。

② 資料の工夫

a 資料の吟味

資料の中で起きたようなトラブルは、ありがちなことではあるが、現在の本学級ではあまり見られないことである。取り合いになりかけても、どちらかが譲り、譲られた方も「ありがとう。」と言える学級である。ただ、中には「ものを大切にすることや、「みんなで使うものだから」ということが内面化されていない児童もおり、教師の吐責が予想されるために行動を抑制している場合も多いと思われる。

そこで、この資料を通して、叱られるからではなく、みんなで使うものは自分のものと同じように、あめいは、自分のもの以上に大事に扱わなければ他の人たちが困ったりいやな気持ちになったりすることを十分に理解させ、さらには目先のことにとらわれず、正しい判断のもとに、進んで正しく行動できるようになってほしいと考えている。

b 資料提示の工夫

読み物資料「やぶれた本」を担当が語り聞かせる。資料は文字だけとし、登場人物の表情や心の動き、場面の様子などを一人一人に想像させ、イメージをふくらませて資料に浸らせたい。

③ 学習過程の工夫

a 導入の工夫

みんなで使うものを自分が使おうとして困ったりいやな思いをしたときのことを想起させ、後段の一般化につなげる。

b 展開（前段）の工夫

中心発問の②で、しげるとよしおが本を取り合う場面を取り上げ、その時の主人公の気持ちを深くつかむことができるよう、それぞれの立場で役割演技の機会をもうける。このことにより、みんなで使うものは、大事にしなければならないと分かっているのに、自分の気持ちを優先してしまっしげるの気持ちに気付くことができると考える。

基本発問の③では、ゆう子の様子を恥ずかしそうにして見ているしげるの気持ちを理解するために、ワークシートに記入する活動を取り入れる。みんなで使うものは自分のその時の気持ちを優先せずに、みんなのことを考えて行動することが大切である点に改めて気付くことがここでの主なねらいである。

c 展開（後段）のくふう

「みんなで使うものを他の人のことを考えて使ってよかった」という体験を自由に発表し合う中で「本当にものを大事にするということは、みんなで使うものを大切にすること」につながることを共感的に理解し、実践化が図られるものとする。

- (5) 本時のねらい みんなで使うものを大切にし、人に迷惑をかけないようにしようとする心情を育てる。

(6) 本時の展開

☆支援

	学 習 活 動	主な発問と予想される児童の反応	学習活動への働きかけ
導	1. みんなで使うものを使って	○みんなで使うものを使おうとして、いやな気持ちになったり、困ったりしたこと	○生活の中で体験したことを思い出させ、

人	困ったことを考える。	はありませんか。	発表させる。
展 開 （ 前 段 ）	2.資料「やぶれた本」を読んで話し合う。	<p>①読みたい本がなかなかみつからないときしげるはどんな気持ちだったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本がめちゃくちゃに入っているから読みたい本が見つからないんだ。 ・こんなにしたのはいったい誰だろう。 ・使う人のことを考えてほしいなあ。 <p>②「よしなさいよ。みんなの本でしょ。」というゆみ子の注意も聞かずに、本の取り合いをして表紙を破いてしまったときしげるはどんな気持ちだったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・よしお君が引っ張るから破れてしまったんだ。 ・ああ、どうしよう。でも困ったなあ。 ・次に読む人が困るだろうなあ。 ・みんなのものなのに、どうしよう。 <p>③本をそろえたり修理したりしているゆみ子の様子を見たとき、しげるはどんなことを考えたでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゆみ子さんが破いたわけではないのに直している。 ・ぼくがやらなくちゃいけないのに恥ずかしいなあ。 ・ゆみ子さんはみんなで使うものだから大切にしているんだな。 	<p>☆資料を読む視点を示してから範読する。</p> <p>○読みたい本が見つからず、いやな思いをしているしげるの気持ちに共感させる。</p> <p>○ゆみ子の注意も聞かずに自分本意の行動から本を破いてしまったときのしげるの気持ちを考えさせる。</p> <p>☆登場人物の気持ちになって考えることができるよう顔の絵を用意する。</p> <p>○ゆみ子の様子を恥ずかしそうにして見ているしげるの気持ちをとらえさせ、みんなで使うものは大切に扱おうとする気持ちを深めさせる。</p> <p>☆考えをまとめ発表しやすいようにワークシートを準備する。</p>
展 開 （ 後 段 ）	3.みんなで使うものを他の人のことを考えて使ったときの経験を発表する。	○今まで、「みんなで使うものを他の人のことを考えて使ってよかったな」と思ったことはありませんか。	○学校や公園などでの自分の行為を思い起こさせ、望ましい行為のあり方を自覚させる。
終	4.保護者からの手紙による体	○みんなで使うものを大切に使ってよかったときの保護者の体験談を聞く。	○人に迷惑をかけずに明るく生活しようと

末

験談を聞く。

思う気持ちをもたせる。

(7) 評価

- ・みんなで使うものを大切にしようとする気持ちが高まったか。
- ・資料提示の仕方は適切だったか。
- ・役割演技やワークシートの活用は効果的だったか。

(8) 他教科との関連

学校生活でお互いに相手のことを思いやり、みんなで使うものは、自分だけでなく、次に使う人のことを考えて使わないと、その人がとてもいやな気持ちになったり困ったりするというところを、折りに触れて話してきた。

また、各教科の学習の中で、みんなで使うものがある場合には、始める前に、みんなで使うものを使うときの約束ごとをそれぞれが考え、ものに対する気持ちをいつでも意識してから活動するように指導している。

このことは、教科指導のみならず、あらゆる学習活動を支える大切な事柄であり、社会の一員として、社会生活を豊かに営むために欠かせないことであると考えている。

誰のものでもどんなものにも、ものを大切にする心を持ち、他の人のものと自分のものの区別はもちろん、いつでも他の人の思いを誠実に受けとめることのできる児童であってほしいと願っている。

(9) 考察

- ・『教師の範読を児童が指でなぞりながら一緒に読む』という丁寧な読み聞かせをすることによって、児童が登場人物に同化し、自分なりにイメージをふくらませることができた。
- ・役割演技を取り入れることによって、登場人物の表情や心の動きについて深く考え、さらに自分を葛藤場面に追い込むことで内面化を図り、広い視野で物事を考え、行動しようとする道徳的心情を高めることができた。また、一人一人が多様なとらえ方をし、十分に発表することができた。さらに、学習のねらいをより深く意識できるような工夫や支援を考えたい。
- ・場面ごとの絵や登場人物の顔の絵などを使うことにより授業の内容をより深く理解し、共感的にとらえることができた。また、発表の場を工夫し、できるだけ多くの児童にその機会を与えることができた。しかし、ワークシートへの記入の時間に余裕がほしかった。
- ・相互指名することで、友達の意見を聞き、友達のよさを認め、さらに自分なりの考えを積極的に発表することができた。また、このような発表を通して、自分自身の考えを見直し、より正しいと思う考えを見い出そうと一人一人の児童が真剣に自分と向き合って考えると言う態度がみられた。
- ・保護者からの手紙を読み聞かせることによって、みんなで使うものを大切に、人に迷惑をかけないようにしようとする気持ちが高まり、今後の生活の中での道徳的実践力を身に付ける足がかりとなった。

4. 研究のまとめと今後の課題

本分科会では、「自ら問題意識をもち、主体的に学習する児童を育てるための支援の在り方」を明らかにするために、下記の3点に留意した研究の仮説を立てた。

- ・ 児童が興味・関心をもち、課題を見出しやすい学習材の選択
- ・ 課題探究的学習活動の在り方
- ・ 児童自ら学習を振り返る評価の在り方

そして、仮説に基づいて実証授業を行ってきた結果、次のようなことが明らかになってきた。

(1) 研究の成果

- ① 児童のもつ願いを受け止め、課題を見だしやすい学習材を選択することにより、児童が興味・関心を示し学習に意欲的に取り組むことができた。
- ② 各教科・単元構成で、児童と学習材との主体的なかかわりあいを深める学習材選択の場、学習材選択の視点を明らかにできた。
- ③ 下記のような学習活動のための環境の工夫や個に応じた対応などの支援をすることにより、課題探究的学習をすることができた。
 - ア. 課題探究に見通しをもたせる支援や、探究の方法に対する助言を加味した学習計画を作成したことにより、主体的な学習活動が展開された。
 - イ. 体験的な学習活動を充実し、表現活動の時間を確保することにより、より主体的な学習活動が展開された。
 - ウ. 適切な資料を工夫し準備することにより、児童が意欲的に学習に取り組んだ。
 - エ. 「児童の探究には、質的・時間的な差がある。」という観点から児童の活動の様相に対応する学習過程、学習形態を工夫することができる。
 - オ. 探究したことをまとめ、発表するための学習カードやワークシートを取り入れることにより、児童一人一人が自分の学習状況をつかみ、その後の学習活動に生かそうとする意欲を喚起できた。
- ④ 自分の考えを発表し、友達と自分のものの見方、考え方、表現の仕方に共感したり、違いに気付いたりすることにより、互いのよさを認め合い、成就感や満足感をもつことができた。
- ⑤ より良い自己評価や相互評価を行うための手立ての見通しをもつことができた。

(2) 今後の課題

- ① 児童が意欲的に学習することができるような学習材の開発を進めていく。
- ② 個が生きる多様な学習形態や学習の場の工夫に、より一層努める。
- ③ 自分や互いのよさを認め合うことができるような自己評価・相互評価の在り方や生かし方をさらに工夫していく。

IV 第二分科会

一人一人のよさを生かすための支援の在り方

1. 分科会研究主題設定の理由

新しい学力観に基づく教育においては、児童が自ら学ぶ意欲をもち、社会の変化に主体的に対応できる資質や能力の育成を図ることが重視されている。このことは、今までのような知識、理解、技能等の定着を重視してきた教育の在り方を根本的に見直し、常に課題をもち自ら考え、主体的に判断し、行動していくことのできる力をもった児童の育成を重視した教育への質的な転換を求めているものと考えられる。

本分科会では、主体的に学習に取り組む児童の育成を目指し、児童一人一人のよさを生かす支援の在り方を研究内容とし、「一人一人のよさを生かすための支援の在り方」を研究主題として設定した。

児童は、自ら向上しようとする意欲をもった存在であり、向上しようとする意欲をその児童のもつよさと考えた。研究主題にある「一人一人のよさを生かす」とは、児童一人一人がもつ向上しようとする意欲を生かすことであり、そのための支援の在り方について研究を進めた。

2. 研究のねらいと仮説

児童一人一人のよさを生かすための方法として、第一に児童一人一人の思いや願い、考えを大切にしたいと考えた。児童は、自分なりの見方や感じ方が大切にされていると分かったときに、自分の個性や創造性をより多く発揮し、意欲的になると考えられる。

第二に、互いに認め合ったり、励まし合ったりする場の設定が必要であると考えた。友達に認められることは、教師の励ましにも増して、温かく児童を力づけるからである。

更に、適切な支援を受け学習課題を解決することにより、児童一人一人が学習に対して成就感をもち自信を深めていくと考え、児童一人一人の資質や能力に応じたはたらきかけをしていきたいと考えた。

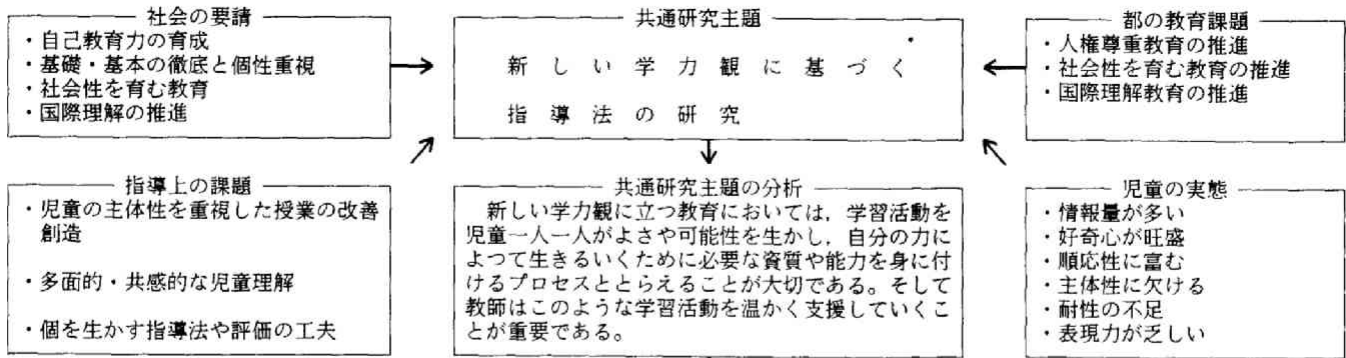
以上のことを踏まえ、学習過程を工夫し、児童の実態や変容に応じた支援の在り方を授業研究を通して検証した。

研究仮説

学習過程の工夫、児童の実態・変容に応じた支援を、以下の3点から行うことで、児童一人一人のよさを生かされ、主体的に学習に取り組む児童を育成することができる。

- 児童一人一人の思いや願い、考えを大切にする。
- 互いに認め合い、励まし合う場を設定する。
- 児童一人一人の資質や能力に応じたはたらきかけをする。

研究構想図



第二分科会研究主題

一人一人のよさを生かすための支援の在り方

研究の仮説

学習過程の工夫、児童の実態・変容に応じた支援を以下の3点から行うことで、児童一人一人の児童のよさが生かされ、主体的に学習に取り組む児童を育成することができる。

- 児童一人一人の思いや願い、考えを大切にする。
- 互いに認め合い、励まし合う場を設定する。
- 児童一人一人の資質や能力に応じたはきかけをする。

学 習 研 究 の 視 過 程

	つかむ 課題把握	調べる・試す・表現する 課題追究	まとめる 課題達成
児童の活動	<ul style="list-style-type: none"> ○学習のめあてをもつ ・こんなことをしたい、できるようになりたいという思い。 ・教師や友達との話し合いにより、めあての調整をする。 ○学習の計画をたてる ・課題解決の見通しをもち、自分なりの考えで各時間の具体的なめあてを設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分なりの方法で解決する ・場の選択、資料の選択、操作、実験観察、思議試技など。 ○他の解決方法を知る。 ・教師の援助や友達との情報交換 ・自分の学習活動を振り返る。 ○友達の良いところを認め、励ます。 ・友達によさに気付く。 ・よいところを自分に生かす。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学習成果を発表する ○学習を振り返る（自己評価） ・単元全体を通してめあてが達成できたか、楽しく学習できたか。 ○相互評価をする。 ・友達によさに着目して、認め合う。 ○新たな課題をもつ ・次の学習のめあてにしたり他に応用したりする。
教師の支援	<ul style="list-style-type: none"> ○知的好奇心にうったえる問題提示の工夫 ・資料提示 ・発問 ・演示 ○課題の確認の工夫 ・話し合いの場の設定 ・個別の言葉かけ ○見通しをもたせるための工夫 ・学習カード ・話し合いの場の設定 	<ul style="list-style-type: none"> ○学習形態の工夫 ・個別学習、ペア学習、グループ学習一斉学習等 ○学習環境の工夫 ・学習の場、情報交換の場、学習材・学習資料、教育機器等 ○学習活動の工夫 ・体験学習・コンピュータ等の活用 ・時間の確保 	<ul style="list-style-type: none"> ○記録の整理、分析検討、考察 ・解決の努力を認め励ます。 ○学習結果の発表、表現等の工夫。 ・認め合い、励まし合い、高め合う場を設定する。 ○学習の反省、自己評価、相互評価の工夫 ・学習カードの活用、工夫 ○学習の発展、応用

児童の実態・変容を把握し、一人一人に応じた働きかけをする。

育てたい児童像

- ◎ 自ら課題をもち、主体的に学習に取り組むことのできる児童
- 友達によさを認め、互いに励まし合える児童
- 自分の考えを自分なりの方法で表現できる児童

3. 実践事例 (第2学年 生活科)

(1) 単元名 「学校のしょうかいをしよう」

(2) 単元の目標

今までの学校生活の中で、知ったこと、覚えたことなど自分なりの方法を用いてまとめ、来年度入学する1年生に学校を紹介する作品を作ることによって、より学校を身近に感じることができるようにする。

(3) 研究主題との関連

第二分科会では、児童は、本来、高まろう、向上しようとする意欲をもった存在であり、その意欲を児童のもつよさと考え、児童一人一人のよさを生かすということは、その意欲を生かすことと考えた。そして、

- ・児童一人一人の思いや願い、考えを大切にする。
- ・互いに認め合い、励まし合う場を設定する。
- ・児童一人一人の資質や能力に応じたはたらきかけをする。

という3点を踏まえて、学習過程の工夫、児童の実態や変容に応じた支援を行うことで児童一人一人のよさを生かされ、主体的に学習に取り組む児童が育成されることが考えられた。

本単元では、その具体的な方法を以下のように考えた。

《学習過程の工夫》

【研究仮説1】 児童一人一人の思いや願い、考えを大切にする。

○児童の意欲を生かした教材選択

児童は、他校の児童が学校紹介をしているテレビ番組を見て、自分たちも同じことをやってみたいという希望をもった。こうした児童の気持ちを生かす教材を取り上げることにした。

○学習形態の工夫

児童は学習の始めから様々な考えをもつことが予想され、その考えを生かすことができるような、個人やグループ等の学習形態を工夫した。

その際、グループ学習の場合には、一人一人の考えが生かせるような小集団にした。

【研究仮説2】 互いに認め合い、励まし合う場を設定する。

○学習結果の発表・表現等の工夫

自分たちががんばったことを互いに認め合うことは、次の活動への意欲につながる。そこで、各時間の最後に作業の様子を発表する時間を設定し、互いのよい面に気付かせるようにした。

【研究仮説3】 児童一人一人の資質や能力に応じたはたらきかけをする。

○学習環境の工夫

児童一人一人は、興味・関心、学習の仕方などにおいて違いがあり、本単元では自分の得意な方法で調べ、まとめる過程を学習の中心にした。児童が用いることが予想される視聴覚機器（コンピュータ、ビデオカメラ、フロッピーカメラ等）を事前に用意しておいた。

《児童の実態や変容に応じた支援》

【研究仮説1】 児童一人一人の思いや願い、考えを大切にする。

学習カードを利用し、自分の活動のようすを振り返ることにより、自分の思いや願いを次時につなげるようにした。

【研究仮説2】 相互に認め合い、励まし合う場を設定する。

各時間ごとに自分たちが工夫したところを発表し、他の児童のよいところを発見する時間を確保した。

【研究仮説3】 児童一人一人の資質や能力に応じたはたらきかけをする。

学習中の児童をよく観察し、必要に応じて助言や援助を行う。

学習カードに書かれたことに対して、よさを認め、児童に対する励ましの言葉を書いたり、問題点が出てきたら児童とともに解決するようにし、児童に学習に対する興味・関心が持続するようにした。

(4) 児童の実態

何事にも一生懸命取り組む児童が多く、また児童同士も仲がよく、毎日楽しく学校生活を送っている。

また、学習内容をきちんと理解し、様々な場面に置いて児童が互いに啓発し合うことも多い。

また、学習面においては、「やる気」をもつことを重点に指導を進めてきているが、積極的に課題に取り組むことのできる児童がほとんどである。ただ、自分の考えをもって学習したり、自分の考えをきちんと発表することについては、その機会が少ないせいか、十分とは言えない。

今回使用する視聴覚機器についての習熟度は、次のようである。コンピュータについては、第1学年の時から毎週1回の割で触れており、お絵描き・ワープロ等の操作方法をしっかり習得している児童が多い。ビデオについては、「ビデオ日記」という方法で互いに写す役や写される役になって操作しているため、機会の操作方法にも慣れ、生活科の授業においても使用したことがある。OHCについては、算数の授業等で使用しており、そのその効果について理解している児童も多い。

(5) 学習計画

第1次 学校のことで知っていることをしよう (1時間)

第2次 学校紹介のポイントを決めよう (4時間)

第3次 学校紹介の作品を作ろう (5時間)

第4次 発表会をしよう (2時間)

(6) 本時の学習 (9/12時間)

① ねらい

- ・児童が、自分の考えたやり方で、必要なものを使って楽しく学校紹介づくりをする。
- ・作業を進める中で、お互いの知っていることを友達に教えてあげながら、助け合って作業をする。
- ・お互いの作品を見せ合うことで、他の児童のよいところに気付く。

	児 童 の 活 動	教 師 の 支 援 と 留 意 点
5	<p>○前の時間までに終わらせた作業を確認して、本時の作業を確認する。</p> <p>c1 今日は、パソコンを使おう。</p> <p>c2 模型を今日で完成させるぞ。</p>	<p>◎コンピュータ室と理科室に必要なものをわけて準備しておく。</p> <p>・本時の作業については、前時の終了時に、作業の進行状況を確認し、計画を立てておく。</p> <p>◎作業を進められない児童については、前時までの作品のよすをみながら、やることをしぼるよう助言する。</p>
	<p>○作業を開始する。</p> <p>C1今日は、校庭にあるものについてまとめよう。</p> <p>C2模型を作るのに、おりがみを使おう。</p> <p>C3ワープロを使って写真を説明しよう。</p> <p>C4他の部屋に行ってビデオで映したい。</p> <p>C5パソコンの使い方がうまくいかない。</p> <p>C6これは、こうやればいいんだよ。</p>	<p>・二つの部屋に別れて作業をすることが予想されるので、片方にかたよらないようにする。</p> <p>・作業を進めていく中で、自分のしている作品には別の機器を使ったほうがよいと考えた児童については、最初に決めた使用の計画表を見て、無理でない限りは変更を認めるようにする。</p> <p>◎作業の進まない児童・グループには、児童同士で解決できるように励ます。</p> <p>◎ビデオを使うグループは、どこで作業しているかを確認して、困ったことがあったら、すぐ行けるようにする。</p>
	<p>○本時までにはできたことを紹介し合う。</p> <p>C1パソコンで、ここまでできました。</p> <p>C2模型が半分まで、できました。</p> <p>C3ビデオで写してきました。</p>	<p>・本時にあたっているグループ（または個人）に発表してもらおう。</p> <p>◎友達のよいところに目を向け、互いのよさが認め合えるようにする。</p>

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ○学習カードに記入する。 ○次時の予告を聞く。 | <ul style="list-style-type: none"> ・今日の学習でがんばったことや、困ったことを書く。 |
|--|---|

③ 評価

- ・ 児童が、自分の考えた方法で必要なものを使って楽しく学校紹介の作品をつくることができたか。
- ・ 作業を進める中で、互いの知っていることを友達に教えてあげながら、助け合って作業をすることができたか。
- ・ 互いの作品を見合うことで、他の児童の作品のよいところに気付くことができたか。

(7) 考察

- ・ 自分たちで表現方法を選択して学習を進めているため、児童が意欲的に活動し、表現方法、まとめ方等にも自分たちのアイデアが生かされていた。
- ・ 最初に作業の目的を確認してからスタートしたので、児童が効果的に無駄なく作業を進めることができた。
- ・ 使用した写真も児童自身が撮影したものなので、児童の視線で撮った写真になっており、説明も分かりやすいものになった。
- ・ 児童が、コンピュータやビデオを上手に操作することができた。これは、第1学年から計画的にこれらの視聴覚機器を操作し、学習に利用してきた成果であると考えられる。
- ・ 児童自身が撮影した写真の説明を書きやすくするために、「取材メモ」を使っていた児童がおり、この「取材メモ」を活用することにより、児童がより学校内のようすに興味や関心をもつとともに、学校で働く人々の存在に気付くことができた。
- ・ 模型作りのグループの児童も、それぞれ工夫しながら、意欲的に作品を作り上げていた。
- ・ コンピュータ、ビデオ、模型作りと3箇所に分かれて作業したが、この場合も教師一人では、素早く効果的な支援を行うことが難しい場面もあり、効果的な支援の在り方については学年合同で授業を進めたり、T・T方式の活用を図るなど今後も継続して検討していきたい。
- ・ 本時の場合、コンピュータを利用していた児童は、ほとんど自分の作業にかかりきりで互いに教え合い、助け合う場面が見られなかった。二人で1台のコンピュータを利用する等の方法を取り入れたい。

4. 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究の成果

本分科会では、「一人一人のよさを生かす支援の在り方」に重点をおき、新しい学力観に基づく児童方の研究を進めてきた。児童一人一人のよさを生かすために、次の3点を支援の中心に据えて、学習過程の工夫及び児童の実態や変容に応じた支援を考慮しながら授業の改善に努めてきた。その3点とは、

- ・ 児童一人一人の思いや願い、考えを大切にする。
- ・ 相互に認め合い、励まし合う場を設定する。
- ・ 児童一人一人の資質や能力に応じたはたらきかけをする。

である。その結果、次のことが明らかになった。

- ① 学習課題に応じたグループ作りにより、児童が自分の興味・関心にしがたって表現方法を選択し、まとめることができた。
- ② 視聴覚教材を使用することによって、学習活動に対する興味・関心が高まり、児童がより主体的に学習に取り組むようになった。
- ③ 視聴覚機器（コンピュータ、ビデオ、フロッピーディスクカメラ等）を使用して効果的な発表をすることによって互いのよさを確かめ合い、認め合うことができるようになった。

(2) 今後の課題

- ① 教科領域のねらいを達成するために、視聴覚機器（主にコンピュータ）の効果的な活用方法をさらに追究していく必要がある。
- ② 児童一人一人のよさを生かすために、学習活動の多様化を図ったが、それぞれの活動への支援をより効果的にするために、児童相互の助け合い、励まし合いの場を設定したり、学習カードを使った自己評価を意図的に行った。さらに、個に応じた支援をより有効なものにするために、T・T方式の活用を検討したい。

V 第三分科会

一人一人のよさを認め合い、高め合う支援の在り方

1. 分科会研究主題の設定理由

これからの学校教育には、複雑に変化する社会の中にあっても常に自分の考え方や生き方をもち、心豊かにたくましく、主体的、創造的に生き抜いて行く人間を育てることが求められている。それは、いかなる困難に会おうとも常に前向きに課題に正対し、共に学び合い、よさや可能性を発揮してよりよい生活や社会の実現を目指して生きていく人間を育てることである。

児童は誰もが「よりよく生きたい」という願いをもっている。この願いに共感し、それに根ざした教育実践を積み上げていくことが、やがて児童に、生涯にわたって学び続ける意欲と主体的・創造的に生きていく力を育むことになる。

そのためには、教師はこれまでの一定の知識や技能の共通した到達だけを重視しがちであった指導を見直し、児童一人一人の思いや願いが児童同士のかかわり合いの中で生きるような指導が重要であると考えた。

そのような学習活動を展開していくための基本的条件の一つが、互いのよさを認め合い高め合おうとする学習集団の成立である。児童は自分とかかわりをもつ友人や集団に対して認められることを願うとともに、互いに分かり合いたい、分かち合いたいという願いをもっている。この願いが達成されることにより、児童は満足感を得て、自分が集団に影響を与えたり、与えられたりすることを実感する。そうした中で育まれた自己存在感、自己効力感をもった児童は、さらに自他の「よさ」を進んで発見し、よりよく生きていこうとする自己実現のいよくを高めていく。

かかわり合うこと、分かち合うことを重点においた、一人一人のよさを認め互いに高め合う支援は、新しい学力観に基づく児童一人一人のもつよさを生かす指導に外ならない。

以上の理由によりこの主題を設定した。

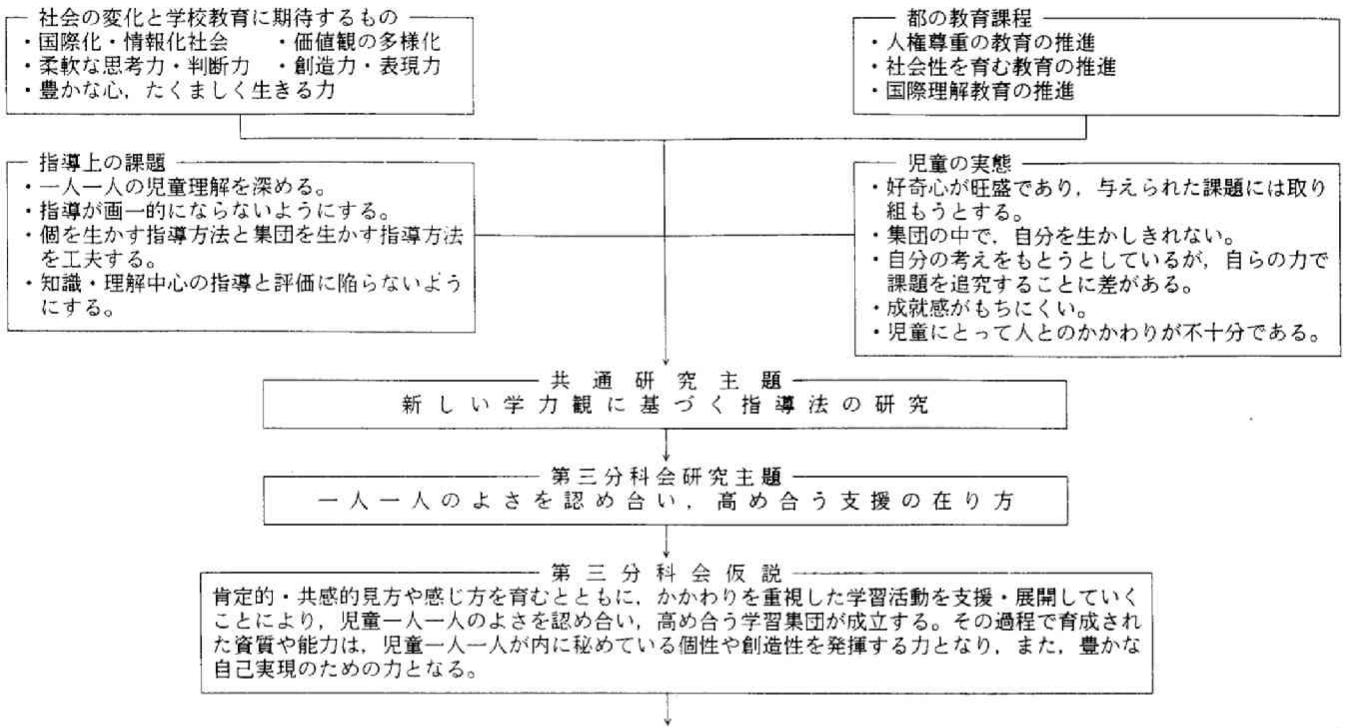
2. 研究のねらいと仮説

個を互いに認め合い高め合う児童を育成するために、一人一人への支援と、個が育つ学習集団への支援という二つの視点から次のような仮説を立てた。

《仮説》

肯定的・共感的見方や感じ方を育むとともに、かかわりを重視した学習活動を支援し展開できるようにすることにより、児童一人一人がよさを認めあい、高め合う学習集団が成立する。その過程で育成された資質や能力は児童一人一人が内に秘めている個性や創造性を発揮する力となり、また、豊かな自己実現のための力となる。

研究の構想図



		学 習 過 程		
		課 題 を つ か む	課 題 を 解 決 す る	伸 び を 分 か ち 合 う
一人一人のよさを生かす	児童の活動	<ul style="list-style-type: none"> ○学習の目当てをもつ。 ○学習の見通しをもつ。 <ul style="list-style-type: none"> ・既習の学習・経験を生かす。 ・自分なりの解決方法を考え計画を立てる。 ○期待・願い・考えをもつ。 <ul style="list-style-type: none"> ・こんなことをしたい。 ・できるようにになりたい。 ・こうじゃないかな。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分なりの方法で解決する。 ○自分の考えを発表する。 <ul style="list-style-type: none"> ・発表の方法を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学習活動を振り返り、自己評価をする。 <ul style="list-style-type: none"> ・目当ての達成。 ・分かる・できるようになったか。 ・楽しく学習できたか。(態度) ・満足できたか。(態度) ・新たな課題を見つけたか。
	教師の支援	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の思いを自分の言葉で表現する ○児童の特徴をつかむ。 ○興味・関心がもてるような課題を工夫する。 ○多様な発表を引き出す場の設定を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○多様な思考に応じる教材・教具の提供。 ○個に応じた助言。 ○多様な発表の方法の提示。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自己評価をして、自分の伸びを確かめる。 ○一人一人の変容を認める。
認め合う・高め合う・分かち合う	児童の活動	<ul style="list-style-type: none"> ○友達のよさを見付ける。 ○集団に目をむける。 ○グループ全体で課題の確認や調整をとる。 <ul style="list-style-type: none"> ・友達の意見を取り入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○友達のよさを認め、互いに相談・助言しながら学習を進める。 <ul style="list-style-type: none"> ・友達と自分の意見の共通点や違いに気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学習活動を振り返り、相互評価をする。 ○友達やグループの伸びを認める。 <ul style="list-style-type: none"> ・よくなってきたこと、出来るようになったことを出し合い認め合う。(考え方・技能・態度など。)
	教師の支援	<ul style="list-style-type: none"> ○自他を集団の成員として自覚する。 ○一人一人の意見に最後まで耳をかたむける。 	<ul style="list-style-type: none"> ○時間の確保 	<ul style="list-style-type: none"> ○相互評価をする。 <ul style="list-style-type: none"> ・グループ、チーム、全体でよさを認め伸びを確かめる。 ○認め合う時間の確保。

目指す児童像

- 個を互いに高め合う児童
- 自己存在感を基盤にもった自己効力感を味わえる児童。
- 意欲的にかかわり、学び合える児童。

3. 実践事例 (第4学年 理科)

(1) 単元名 「物のかさと温度」

(2) 単元の目標

<総括目標>

空気、水及び金属を温めたり冷やしたりして、その体積の変化と熱とを関係付けながら調べ、見出した問題を興味・関心をもって自分なりの方法で追究する活動を通して、物の変化のきまりについての見方や考え方を養う。

(3) 研究主題との関連

① 単元について

本単元では、空気、水、金属を温めたり冷やしたりしたときの様子の変化を学習内容としている。それらの素材を加熱したり、冷却したりする過程の観察が重要である。そこで、研究主題に迫るために、次の過程を考えた。

ア 各自が実験計画を立てる。

イ 各自の計画をグループに持ち寄り一つの方法にまとめる。

ウ グループで実験を行う。

エ 実験の結果から明らかになったことを話し合う。

オ グループで話合ったことをクラス全体に発表する。

上記の過程の中では各自が自分の言葉で表現するように助言し、励まして、互いに付け足したり、修正したりすることを大切にする。

② 研究の視点として

本単元では、研究主題に沿って次のような手立てを考えた。

(P……個人への支援 G……集団への支援)

<児童一人一人のよさを生かす>

ア 自分の思いを自分の言葉で表現できるようにする。(P)

気付いたこと分かったことを表記したり、発表したりする。

イ 児童の発意、発想を大切にしたい実験が行えるように援助する。(PとG)

ウ 個や集団に応じた助言をする。(PとG)

ひとり言やつぶやきを拾って、その発想のよさや違った見方などが他に広まるようにする。

自分なりの実験方法を考え出せるように、児童の思考に沿って具体的に問いかけ、助言する。

エ 多様な発表方法を提示する。(PとG)

<認め合う、高め合う、分かち合う>

ア 自他の集団を成員として自覚させる。(G)

児童相互のはたらきかけを大切にする。

互いに教え合ったり、助け合ったり、認め合ったりする場を設定する。

イ 児童一人一人の意見に最後まで耳を傾ける。(PとG)

児童一人一人が実験計画を立て、グループの中で助言し合い、よりよいものに

まとめる。

ウ 自己評価・相互評価をする。(PとG)

振り返りカードや発表を通してできたこと、分かったことなどを分かち合う。

エ 認め合う時間を確保する。

互いの学習を認め合い、振り返る時間を確保する。

(4) 児童の実態(アンケート結果も含む)

- ・発表する力に差があり、意欲的に挙手する児童が決まっている。
- ・操作活動を好み、積極的に取り組む意欲をもっている。
- ・誰とでもグループを作り活動できる。
- ・観察するときは、細かいところまでよく観察できる児童が多い。
- ・分かっているながら、絵や言葉で適切な表現ができない児童が少なくない。
- ・動植物に興味・関心をもっている。温度と物の変化としての体積変化・温まり方、三態変化に対する興味・関心がうすい。

(5) 学習計画(全9時間扱い 本時3/9)

- ① 空気を温めたとき 4時間
- ② 水を温めたり、冷やしたりしたとき 2時間
- ③ 金属を温めたとき 2時間
- ④ 作ってみよう 1時間

(6) 本時の学習 (3/9)

(1) ねらい

温度の変化によって空気は様子が変わること、自分たちの計画した実験をもとに確かめる。

(2) 本時の展開

	児童の活動	教師の支援と留意点
つかむ		
	温度の変化による空気の様子を調べるために 入れ物にふたをして、温めたり、冷やしたりしてみよう。	
解 決	本時の実験 ○実験計画にそって実験をする。 ・温めると膨らんできた。 ・もっと湯を熱くすれば、	・児童の発想を生かして、温めたものと冷やしたものを互いに入れ替えたり、湯の温度を変えたりして実験できるように助言する。

<p>すすめる</p>	<p>もっと膨らむのではないかな。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・氷で冷やす実験もしてみよう。 ・冷やすとだんだんへこんでいくよ。 ・これをもう一度温めてみようよ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・できるだけ多くの児童をほめたり励ましたりする。 ・実験で困っている班には、原因をさぐり、解決できるように言葉かけをする。 ・何が確かめられたかを意識付ける。
<p>分かち合う</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin-bottom: 10px;"> <p>話 し 合 い</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ○実験結果からわかったことを話し合う。 ○振り返りカードを記入し自己評価・相互評価をする。 ○実験から分かったことを発表し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いの時間を確保する。 ・カードには、図など分かりやすく記入するポイントを示す。 ・意見のくいちがいを認めながらよりよい方向付けをする。

(3) 本時の評価

- ・自分たちで計画した実験をしようとしていたか。
- ・空気のかさが温度の変化によって変化することを確認することができたか。
- ・十分に話し合い、自分の意見や思いを話そうとしていたか。
- ・友達の意見に耳を傾けることができたか。

* 資料 —— 授業で使用した振り返りカード —— 自己評価・相互評価の項目

今日		できた	わからない	できなかった
の	今日の授業は楽しかったか。	_ _ _ _ _ _ _	_ _ _ _ _ _ _	_ _ _ _ _ _ _
授	協力して実験できたか。	_ _ _ _ _ _ _	_ _ _ _ _ _ _	_ _ _ _ _ _ _
業	自分の意見が言えたか。	_ _ _ _ _ _ _	_ _ _ _ _ _ _	_ _ _ _ _ _ _
を	友達のよいところに気付いたか。	_ _ _ _ _ _ _	_ _ _ _ _ _ _	_ _ _ _ _ _ _
振	つけ足しの意見が言えたか。	_ _ _ _ _ _ _	_ _ _ _ _ _ _	_ _ _ _ _ _ _
り	がんばって実験をしていた人を見付けられたか。	_ _ _ _ _ _ _	_ _ _ _ _ _ _	_ _ _ _ _ _ _
返	すばらしい考えを出した人を見付けられたか。	_ _ _ _ _ _ _	_ _ _ _ _ _ _	_ _ _ _ _ _ _
っ	協力して実験をしていた人を見付けられたか。	_ _ _ _ _ _ _	_ _ _ _ _ _ _	_ _ _ _ _ _ _
て				

(7) 授業の考察 — 観察記録をもとに明らかになったこと —

- ・「分かち合いの時間」を確保した学習活動の展開は、「一人一人のよさを認め合い、高め合う児童」を実現する上で重要なことである。
- ・かかわりを重視した学習活動を展開することが分かち合いを一層深めていくことになる。
- ・有効な言葉かけや支援を行うためには、児童のつぶやきや動きに合わせた支援と単元を見通した計画的、意図的な支援の必要性がある。
- ・実験の方向を支援していても見届けがなかったために再度同じことを支援しなくてはならない場合もあった。支援の言葉かけとして方向性を示すとともに、その後の児童の活動を見届けることが大切である。
- ・グループごとに実験の計画を立てたため、どの子も早く実験を始めたいと思っている様子でまた、協力して準備や実験ができていた。実験の途中や実験の結果、考察の話し合いで自分の言葉で素直に自分の考えを出せる児童が多かった。相互評価でもがんばっている友達を見付け、それを認めることができていた。グループ内の教え合い、学び合いの姿勢が育ちつつあるといえる。
- ・児童の発表が画一的であった。多様な発表を引き出すためには発表の形式を固定することなく、学習の活動の様子が生き生きと伝わってくるように助言する必要がある。

4. 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究の成果

- ・話し合いの中で相手が何を言いたいか、真意をくもうとしてきた。
- ・グループ活動の意義が児童の中で自覚できるようになってきた。
- ・自分の言葉で表現することによって意欲の高まりが見えてきた。
- ・自分の言葉で表現できることが自信につながってきている。
- ・児童相互の人間関係がよくなってきた。
- ・かかわりを重視した学習活動の中に分かち合い活動を入れることは、学習集団を創っていく上で有効である。
- ・分かち合いには様々なスタイル、段階があることが分かった。
- ・分かち合いの初期の段階には混沌とした状態があることが分かった。
- ・分かち合うためには時間がどうしても必要となる。時間の確保ができなければ効果がない。

(2) 今後の課題

- ・教科によって時間数の弾力化は難しいので、分かち合いの時間をどう確保していくか。
- ・かかわり合い・分かち合いの段階を明確にできないものか。
- ・分かち合いのレベルの違いによる支援の在り方を探る。
- ・児童同士のかかわり合いや教師の支援などが明確になるような授業記録の取り方を工夫をする必要がある。

VI 研究のまとめと今後の課題

1. 研究のまとめ

共通研究主題「新しい学力観に基づく指導法の研究」に迫るために、本年度は、三つの分科会を構成して、研究に取り組んだ。

本研究では、①自ら問題意識をもち、主体的に学習する児童を育てるための支援の在り方（第一分科会）②一人一人のよさを生かすための支援の在り方（第二分科会）③一人一人のよさを認め合い、高め合う支援の在り方（第三分科会）と、各分科会がそれぞれの研究を進める視点を決め研究の構想図を作成し、研究のねらい、仮説、方法を明確にすることに努めた。

その結果、研究のまとめとして、次の点が明らかになった。

- (1) 一人一人の児童の思いや願いを受け止め、課題を見出しやすい学習材を選択することにより、児童が興味・関心を示し、学習に主体的に取り組むことができた。
- (2) 課題追究に見通しをもたせる支援や、探究方法に対する助言を加えた学習計画を作成することにより、主体的な学習活動が展開された。
- (3) 学習過程の工夫や個に応じたはたらきかけをすることによって、児童一人一人が達成感や満足感をもつことができた。
- (4) 視聴覚機器の効果的な利用により、学習に対する興味・関心が高まり、児童がより主体的に学習に取り組むようになった。
- (5) 話し合い、学び合いをするなかで、他とのかかわりを深め、互いのよさに共感できるようになった。
- (6) 質の高い話し合い活動を経験することで、児童は互いに相手の言いたいことを理解しようとしたり、グループ活動の意義を自覚できるようになった。

2. 今後の課題

研究の結果、次の諸点が課題として残り、今後さらに深めたいと考えている。

- (1) 児童が主体的に学習を進めることができるような学習材の開発をさらに進める。
- (2) 児童一人一人の興味・関心、思考などの広がりに対応できるような学習計画を工夫する。
- (3) 児童一人一人のよさを生かすための学習環境や学習形態を一層工夫する。
- (4) 児童一人一人のよさや可能性が高められ、豊かになるよう自己評価や相互評価の研究を進める必要がある。